

座談会

平成3年10月31日於スベーストク（東京八重洲口）にて座談会開催 出席者下記の通り。

平野 一博	(平成1年卒)
加藤 正裕	(平成2年卒)
井上 雅博	(平成2年卒)
清水 政志	(平成2年卒)
井端 隆	(平成3年卒)
松井 隆志	(平成4年卒)
大束 陽介	(平成4年卒)

1. 体育会バドミントン部の現状

大束 昭和63年から現在までの間にバドミントン部に在籍された方に今日は来て頂きましたが、さっそく、まず、現在の我が部の現状について、話し合って頂きたいと存じます。御存知の通り、今年の春、史上初の3部降格ということになってしまったわけですが……

井上 僕は、実を言うと、今の練習で、よく、今の位置に残っているなどという感じがするのですが。

平野 うーん、僕は、この間、3部の試合を見に行つて、これだったら、今のうちの練習をしていれば勝てると思つたね。

井上 どう考えても、1部の選手と、2部、3部にいる選手とではセンスが違いますよね。だから、それを、うちは補う練習をしなくてはいけない。そのためには、もつと、外に出て、強いプレイヤーの技術を盗まなければいけないと思う。僕らの代のミーティングでは、強い選手を練習にどんどん連れてくるということを話し合つて決めたが、あまり、実行されなかつた。

大束 今年は、春には、早稲田のOBの佐藤さんに来て頂いたりしました。

井端 しかし、今の現役の部員では、外に練習に行つても大した効果がないのでは。

平野 昔、五月女さんは、日吉の並木道を1度も校舎の方に曲がらず、記念館の方へむかう毎日だったそうで、そのへんから、今の人間とは覚悟が違う。

井上 今の人間は、何か、元気が足りないし、昔ほど、あいさつもしつかりしないし、練習に来る先輩方も、驚くくらいですよ。

加藤 今、1・2年の部員は何人いるの。

大束 男子9人女子1人です。

井上 人数の問題もあるけど、もつと礼儀のしつけについて、上級生は厳しく言った方がいい。戦績の低下は、もちろんだけけれども、礼儀が成っていないというのは、それ以前の最低レベルの問題なのは。

清水 昔は、日吉の川のむこう岸から、自己紹介をしたりした。

大束 松井が主将になってからも、川のむこう岸から関連への目標を言わせたりしました

が、今の下級生は、結構、言うのをためらってしまふところがあります。

松井 昔は、みんな進んでいろいろ挑戦的なことを言ったりしたんですけどね。

井上 今は、みんな仲良しで、間違ってもいから、自分から何かやるという人間が少ない。

松井 仲が良いと言っても表面的な感じで、本当に言いたいことを言っていない。

井上 上級生はもつと責任をもつて下級生にあたらなければダメなのは。

平野 昔、小俣さんが言うには、最終的には人間は弱いところがあるから、大学生と言えども、半ば強制的に、厳しくたいて、限界を伸ばしてやらないとダメというところがあるということ、やはり、厳しい部分には必要だと思う。

加藤 ある一定のレベルの選手になると、自分からきつい練習に取り組むようになる。上手くなるには、きついのが当り前という発想がある。

井上 1人抜け出して自分からやり出す人間がはいればね。

松井 今は、人数が少ないので、どんどん悪い方へ、むかつてしまふ。

大束 平野さんの代も、人数が少なくで大変だったのではないですか。

平野 2人で、役割分担して、やれることを精いっぱいやっていたね。

井上 今の最上級生の状態に似ているわけだけれども、もつと、来年度の主将の奥出も、1人で、やれること精いっぱいやって、その上で、若いOBにいろいろ相談するなりして頑張っで欲しいね。

平野 人数が少くないというのは、最初から、わかっているのだから、自分のやれる役割を

しっかりとわかっていて、それを一生懸命頑張っでやればいい。自分というものの活かし方だと思う。僕の場合、上級生のやり方をみて、自分が上級生になったら、どうやればいいのか、みていた。

井上 人数が少ないと、上級生が自ら、模範となっでいくという気持ちがないと、下級生もまともないだらうね。

井端 今は、上級生も言うだけでなく、実際に試合に勝っではじめて、言葉に説得力が生まれるわけで、そういう意味で上級生の置かれてる立場は厳しいでしょうね。

井上 試合で上級生が必死になっで頑張れば、下級生も、これだけ、あの人が頑張っでいるんだからということ、必死になっでついでくるんではないかな。

井端 ただ、今思うのは、最近の下級生は、気を抜いている上級生がいたら、追い抜いてやろうというハンタリーさが足りないですね。僕なんか2日酔いの清水さんと試合して、フイナルまでいっで、これは勝てると思いきや、負けてしまふというのが悔しくて仕方なかったですよ。

加藤 政志も大学入っでから、かなり頑張っでたよな。

清水 半分、義務感みたいなものがあつたね。とにかく、負けるのが悔しかったよな。

加藤 井端も頑張っでたね。
井端 塾高時代、きつい練習をいっぱいして体育科の教師から、おまえら、いつも走っでばかりだな、とか言われて、試合に勝っでないのが悔しくて、大学で頑張っで勝ちたいという気持ちか強かつたですね。

2. 部員減少について

大束 最近、入試が厳しくなっできまして、

そのせいか、部員も減少し、有望な選手も、入ってこなくなりましたが、そのへんに、つきまして、皆さんに、話して頂きたいと思えます。

井上 少しでいいから、頭ひとつ抜けている人間が入ってくれば、それで、その人間が、ひっぱっていつてくれるのではないかな。

加藤 井上が、言うのは、あくまで、理想なのでは。慶応の良さを、活かすのであれば、幼稚舎からの一貫した強化だよな。

松井 塾高のバドミントン部も、一時期に比べれば、人数が増えました。

井端 最近、藤沢の方で、A・O入試が出来てから、逆に、どここの体育会も、それに頼りつきりになって、慶応のいい伝統が失われている問題があるのではないですかね。A・Oは確かにメリットだけでも、入れる人間は限られているわけだし。

清水 そんなインターハイ出た選手って言ったってたかがしれてるしさ。

井上 ただ、人数が減っているということから言えば、みんな、今は、慶早戦でも、試合に出られるという安心感からか、みんな、たんでいるよ。大体、コートに入れること自体が当たり前になっているしね。

平野 そう、昭和30年代なんか、本当に練習が終るまでコートに入れない人もいた。

大束 僕が思うには、女子の場合なんか、あまり厳しくすると、部員が入ってこないのじゃないですか。

平野 松尾みたいにならないうね。

大束 今は、本当に厳しくしたら、みんな、やめてしまうのではないかと心配ですよ。

平野 確かに人数がいなくてというのは問題だね。

井上 塾高からでもいいから、とりあえず、頭数だけは、そろえたいな。

3. 思い出あれこれ

—体育会への思い—

平野 この部に入っていて良かったなと思うのは、バドミントンというのは、本来、団体スポーツだけれども、リーグ戦で、ああ、チーム一丸となって、戦っているんだな、という意識を、木村さんの下で、副務として、働いているときに強く持って、これが、慶応の体育会にとって大切なんだと思えたことかな。

大束 僕、いちばん覚えているのが、平野さんが、リーグ戦の時『負けた人間出てこい』と言って、みんなの頬をひっぱたいたことですね。あの時は、びっくりしました。

平野 そういうことは、あまり、良いと思っていないのだけれども、まあ、仕方ないときもあるのかなと思う。

井上 その気持ち、わかりますよ。

平野 それと、やはり、記念館のコートで、練習出来ることを、誇りに思ってたらしい。

井端 記念館では、必ず、自分より強い人間がいるわけですからね。僕が塾高のとき、加藤さんが記念館で練習しているのを見て、あこがれましたね。

大束 記念館っていうのは、サークルや一般学生は、使えないわけですからね。

加藤 僕が覚えているのは、主将の時に、下級生を、鍛えることに主眼を置いて、厳しい練習をやったことかな。やはり、井端も、言っていたけど、これだけの練習をしたならば、勝てないと、みんな悔しいよね。だから、みんな、発奮して頑張るよね。そういうところが良かったんじゃないかな。主将として、下級生が、目に見えて、頑張ってる、ランニング

を速くやってやるうとか、ウエイトをいっばいあげてやるうとか言う気になってくれた時が、いちばん、うれしかったね。上級生は、自分でやるのが当り前というか、出来なければ、恥しいということ、任せていたけれど、下級生は、これから鍛えていかなければ本当にダメになると思ってどんなに厳しいメニューをやらせたね。それと、もうひとつ良かったと思うのは、慶早戦で勝ったことかな。お前ら、ダメだとか言われながら、みんな頑張って、勝ってくれたのが良かったね。

平野 私が、主務のときは負けて、大変悔しかったよ。

加藤 あと、今までの話を聞いて思うのは、バドミントン部の今後として、前提となるのは、ある程度人数を集めて、みんな頑張る、ということだよ。そうしたら、もともとと、今より厳しい練習をしていいと思うんだよね。最初とか、みんな受験で体力がなくて、まず、そこから始めなくてはならない。確かに、人数が少ないと、厳しいことやると、やめてしまうのではないかというのが怖いけどね。

大束 甘いことを言って、誘っても、結局、みんな、長続きしないことですよ。ね。
加藤 今、考えてみると、あとになってみれば、ラソニングとか、トレーニンングとか、いい思い出でしょう。

大束 加藤さんは、現役の時、何がいちばん楽しかったですか。

加藤 やはり、練習の後にビール飲むのが、最高だったね。

大束 清水さんは、どんなことが、いちばん思い出として、残っていますか。

清水 4年生のとき、慶早戦で、勝って、その後の秋のリーグ戦で、早稲田とあつた時、

3—3のタイで、最後の第4シングルスで、藤本とやったときかな。あと覚えているのが、井端と昔いた、鈴木学と、日吉と三浦海岸を走ったときとか、最初のうちは、走っていたけど、あとは、ずっと歩きたつた。

大束 井上さんは、どういったことが思い出として、残っていますか。

井上 この代にすることが出来たことが、いちばん良かったかな。加藤がいて清水、土屋、高田、喜多がいって、下には諏訪たちがいて、こういったつながりを、この先、ずっと続けていきたいし、時々、どこかで会って、酒を飲んで、いろいろ、話をするのがいいなと思うよ。あとは、最後の秋のリーグ戦で、喜多と組んで、出してもらえたことかな。確か、専修戦で、結構、充実してたね。

加藤 井上が、すごく真剣だったのは、慶早戦の出場選手決め、夏合宿だよな。

井上 あの時は、出られるか、出られないかの瀬戸際だね。結構、きつかったけれども、気合が入っていた。

平野 煽恋の合宿の時も熱かったね。

井端 高原で、スワッシュが、みんな異常に速かったですよ。

井上 いろいろ、マネージャーやれとか、学連行けとかあって辛かったときもあったけどね。でも、今となれば、みんないい思い出だね。大学に来て、試合に出ることの出来ない人間が、どんなにうれしいをしているか、わかったし。人数も昔は多くて、コートに入れなくて、試合とか、入れてもらった時は、本当に、うれしかったのを覚えている。そういった意味で、思うのは、OBの人達も、もっとイレギュラーの選手にも、いろいろ面倒をみてあげて欲しいということだね。

加藤 OBと飲みに行くのが楽しかったですよ

ね。

井上 本当にそうだね。僕とか、たまに佐藤さんとか山本さんに、声かけてもらったりすると、本当にうれしかったし、良かったと思う。自分も、そういうOBになりたい。それが、体育会の良さだと思うし、声かけられた部員も、入ってきて良かったと思うてくれるのではないか。人間的に成長出来る場だったと思うよ。まあ、下級生には、いつも、手の時計をもって、罰則をやらせていたという、イメージかいかもしれないけれど。

加藤 俺から、まわしてくれって言ってもあったしね。

大束 結構、胸がきりきりする思いがしましたね。罰則のときは。

井上 自分の専修戦のことからして考えてみると、結構、めったに出られない人が試合出ると、実力以上のものが出るね。専修戦で、自分の試合が終った時、1年に『楽しませてもらいましたよ』と言われた時、ジーンときたね。

清水 あのととき確か、加藤が、第4シングルスで、ジャンピングスマッシュが久し振りに炸裂して、うちが4―3で勝ったんだよね。

加藤 本当にいい思い出だね。みんなで一致団結して頑張ったというかね。

井上 本当にいい雰囲気だったよね。

大束 井端さんはどんなことが、いちばん、思い出として残っていますか。

井端 自分がバドミントン部において幸せな期間にいたような気がする。ただ、結果が出せず、4年の時には、春、秋、入替戦に出たのが、残念だった。最後の夏にけがをして、つらかったけれど、秋にリーグ戦に出られたのが本当にうれしい。特に秋の入替戦で、いきなり第1単で出て、本当に苦しかったけれ

ど、みんなの応援に支えられて勝ったのも本当にうれしかったです。

大束 松井はどう？

松井 下級生のうちは、非常にやりがいがある。あったのだけれど、上級生になって、自分もチームも負けて、特に3部に落ちたときは、空しく、無力感でいっぱいでした。今後、奥出や、塾高の手助けをしていきたいと思っています。あと、最後に、シングルスで、インカレに行けたのがいい思い出です。

大束 いろいろ、話題が出て、大変、充実したものとなりましたが、以上で、座談会を終りにしたいと思います。皆さん、今日は、お忙しいところ、誠に有難うございました。